

新書（学問分野に関する書籍）を読む

1. 新書とは

173mm×106mm サイズの教養本。専門分野の解説や学問の入門的内容が多い。文章は、専門家があるテーマについて論じている、いわゆる「評論文」。国語の教科書や試験で出題される評論の素材は、新書から取られていることが少なくない。ちなみに11月の模試で出題された文章は、ちくま新書の『思考の補助線』（茂木健一郎・著）の一部であった。

新書を刊行しているのは大手の権威ある出版社がほとんどで、著者は多くが研究者・学者であるため、内容の信頼性が高い。大学に入ると、研究を進める上で、先行研究の論文や専門書を購読することは欠かせない。そういった書物は専門的な知識がないと読めないが、新書は一般向けに書かれており、それらよりも易しい学問の入門書と言える。

新書の例

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| ・「オウム真理教とは何だったのか」PHP 研究所 | ・「がんはなぜできるのか？」講談社 |
| ・「歴史と戦争」幻冬舎 | ・「土 地球最後の謎」光文社 |

新書を読んで学べることは、以下の三つである。

- ① 専門分野に関する基本的な知識
- ② 専門分野の研究の基本的な方法
- ③ 学問における論証の方法

2. 今、なぜ新書を読むのか

先月、青峰探究中間報告会が終わった。報告会を通して、自分たちがとっている（とろうとしている）調査方法の妥当性（場合によってはテーマ設定の妥当性）が確認できただろうか。調査によって得られる資料は、研究にとっての生命である。それはどんな資料でもいいわけではなく、研究目標にふさわしいものでなければならないし、信頼性の高いものでなければならない。これまでは、何をどのように調べれば有効な資料が得られるのかということを、自分たちの研究テーマに即して班で知恵を出し合いながら考えてきた。では専門家は、研究する際に、どのような方法でどのような資料を収集し、どのように考察し、どのように結論を導いているのか。報告会を終えた今、こうしたことに着目しながら新書を読むことで、研究に関する理論と知識を学び、自分たちの研究の仕方を見つめ直し、改善することにつながっていく。自分たちの研究の道しるべをつかむために、新書を読む。（学問分野に関する本でもよい。）

新書（学問分野に関する書籍）レポート

○学問分野

○書籍（書名・編著者名・発行年月日・発行所）

○各章の要旨（第 1 章～第 3 章＋最終章） ※班の人に後で内容を説明することを意識して書く。

第 1 章【】

第 2 章【】

第3章【

】

最終章【

】

○感想（調査方法・提示されていた資料・考察の仕方・結論などについて）

（ ）班 （ ）組 （ ）号 （ ）